

螺鈿

螺鈿（らでん）は、漆の中に小さな真珠貝を埋め込む装飾技法である。この技術が 8 世紀に中国から伝わったことは、奈良・東大寺の正倉院宝物から発見された遺物によって証明された。その後、螺鈿は金や銀の蒔絵と一緒に、日本の漆器によく使われる技法となった。また、小物や生活用品だけでなく、京都近郊の平等院鳳凰堂の豪華な天井装飾など、大建築物にも使用された。

マザーオブパールは、軟体動物の貝殻の内側にできる真珠層と呼ばれる真珠のような物質のことである。貝の種類によって真珠の色や質は異なるが、螺鈿に使われるのはアワビ、チョウガイ、ヤコウガイ、オウムガイなどが多い。どの貝も輪郭や真珠光沢の模様が異なるため、デザインに合うものを探すのが最初の難関である。

次に大きなハードルとなるのが、適切な真珠層の破片採取することである。まず、貝の両面を砥石やグラインダーで削り、真珠層の表面を比較的平らにする。貝の大きさや自然なカーブによって、採取できる大きな破片の数が制限される。真珠層はもろいため、採取した真珠層の厚さによって、使い道が決まる。厚さ 0.1 ミリから 2 ミリのものを「厚貝」、それ以下のものを「薄貝」と呼ぶ。かつて薄貝は 3 ～7 日間煮て、薄い真珠層をはがして作られていた。現在は、機械式の研磨機を使用しているため、摩擦が起きないように貝を水で冷却している（そうしなければ、長時間研磨している間に熱で貝が傷んでしまう）。厚貝、薄貝のほか、真珠貝の小片を粉碎した「みじん貝」という虹色の粉もデザインに使うことができる。

真珠層が十分に確保できたら、次は形を切り出す。作品の厚さにもよるが、糸のこ、精密ナイフ、パンチプレート、酸エッチングなどを使って切り出す。さらに、細い線の彫刻や絵画、半透明の薄貝の裏面に金箔を貼るなどして、貝殻に装飾を施すこともある。

次に、切り出した貝殻を漆器にはめ込んだり、その表面に貼り付けたりする。その上に漆を塗り、研ぎ出す。漆器の装飾技法のひとつである蒔絵は、螺鈿と組み合わせて使われることが多く、虹色の白、ピンク、青などの色調に金属銀や金を加える。

石川県立美術館には、15 世紀から現代に至るまで多くの螺鈿漆器が収蔵されている。その中には、国指定重要文化財 1 件、石川県の重要文化財も多数含まれている。

螺鈿は 1999 年に、重要無形文化財に指定された。